

第2学年 保健体育科学習指導案

日 時 令和6年5月31日（金）公開授業Ⅱ

学 級 岩手大学教育学部附属中学校

2年A組 34名

会 場 体育館

授業者 佐々木 篤 史

1 単元名 球技 バレーボール

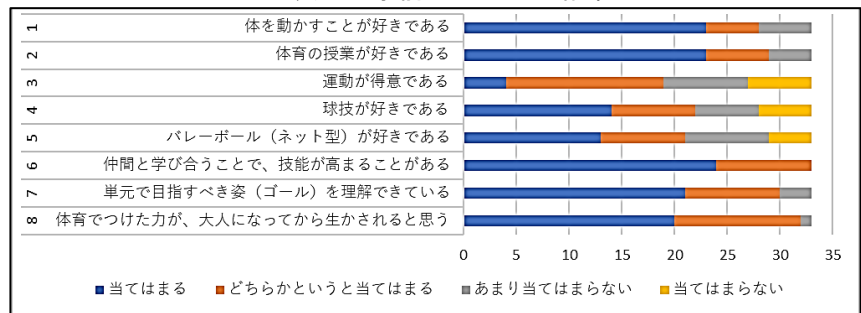
2 単元について

(1) 生徒観

生徒は、昨年度の体育の授業において、球技（ハンドボール、ソフトボール、バスケットボール、卓球）、マット運動、水泳、陸上競技（短距離走、リレー）、柔道を経験した。2年A組の生徒に、体育に関するアンケートを実施したところ、表1の結果となった。

表1 事前アンケート結果

体を動かすことや、体育の授業を好きという問いに対し、肯定的に答えた生徒は全体の9割近くになった。本クラスの生徒は、授業の開始前に、率先して準備を行ったり、少しでもボールに触れたりして仲間と楽しもうという姿勢が



見られる。また、仲間と共に課題解決を図ることが技能向上に繋がると感じている生徒も多く、これまでの学習で何かしらの成功体験を積んできたことが垣間見える。一方で、「運動が得意か」という問いに対しては、「当てはまる」と答えた生徒は1割程度にとどまった。また、球技、特にバレーボールに対して苦手意識をもっている生徒が3割以上いることがわかり、チームの活動に何かしらの役割を果たせた経験が少ないことが予想される。しかし、授業内の仲間との関わりが技能向上に生かされていると感じられていることや、生徒一教師間で目標が共有されていることを継続しつつ、生徒が生涯にわたるスポーツの実践につなげられる資質・能力の育成を目指していきたい。

(2) 教材観

球技は、ボールを巡る攻防の繰り返しで、チーム対チーム、または個人対個人で得点を競い合うゲームである。その中でもバレーボールはネット型に分類され、相手コートの空いている場所に返球し、一定の得点に早く到達することを競い合うスポーツである。空いた空間をつくらないなど、ボールを持たない時の動きの技能が高まることで、互いに作戦を工夫しフォーメーションをつくり上げていくことに面白さがある。

バレーボールを授業で扱う際に、基本的な技能であるパスの受け渡しに躓く生徒が多く見られる。その結果、サーブカットが上手いかずに、ただただサーブによってのみ得点が繰り返されるという状況を多く見てきた。この形だと、バレー本来の魅力である空いている空間を狙って攻撃することや、相手のブロックやタイミングをずらして得点するということに到達することが難しい。今回の授業では、その部分やボール操作を簡素化することで、フォーメーションや作戦に意識を向けさせることを狙っている。意識が相手の守り方との関係に向くことで、空いている空間をどのようにつくりだすか、相手のブロックとのずれをどう生み出すのかといったネット型における見方・考え方に迫ることができると捉えた。

(3) 教科研究との関わり（指導観）

本校保健体育科では、「運動の楽しさや価値に気づき、豊かなスポーツの実践ができる生徒の育成」を主題として研究を進めている。そして、教科として育成したい資質・能力を、図 1 のように捉えている。

研究の視点① 個別最適な学びと協働的な学び

本時で扱うバレーボールは、教材観でも述べたとおり、素材のまま授業で扱うと真の楽しさを味わうことが難しい。しかし、場やルール、チームの人数を工夫することで、生徒が着目すべき部分が明確になり、個の役割もはっきりとさせることができる。メンバーが 3 人という中で、ただボールを触ることだけがプレー

に関わるのではなく、おとりになったり、空間を埋めるような動きを予測したりすることが求められていく。チームごとに最適解を見つけていくことも重要であり、同時に自らの果たすべき役割を仲間とのやり取りの中で見つけていくことができるようにしたい。一つの攻撃のパターンが、必ず全員が関わる中でつくり出されることは、すでに決まっている型にはまるだけではなくそれぞれの特徴を捉えたり、相手チームの動き方を観察したりする中でも、目まぐるしく変わっていくことである。その繰り返しは個別最適な学びであると同時に、仲間との連携や意見の交流が繰り返されることで成り立つことであるため、協働的な学びなくしては、相手よりも多く得点するという種目の目標に近づけないことになる。運動観察や自己の運動感覚を駆使して運動の修正を行っていくという、球技の見方・考え方を働かせながら、生徒がよりよい動きを獲得していくことを目指したい。

研究の視点② 教科横断的資質・能力の育成

本単元では、動きのコツや動感を自らの言葉で表現するということを積極的に行わせたい。中々言葉にしにくい暗黙知であるが、相手に伝わるように説明し技能の向上につなげることや、説明するために ICT 機器を活用することを生徒自らが必要観をもって行うような教材の準備をしていきたい。

研究の視点③ 評価の充実

オリエンテーション時に単元計画、評価方法、目指すべきゴールを共有していく。特に映像を活用し、実際に競技として行われているバレーの映像を確認して、フォーメーションやブロック、ボールを持たない動きの効果について確認していく。また、毎時間の生徒の振り返りから、生徒の困り感に寄り添い、計画を柔軟に修正していくことも視野に入れていく。それを行った上で、努力を要する生徒へのアプローチを充実させ、目標への到達度が“努力を要する”段階で終わらないように指導と評価の一体化を図っていきたい。

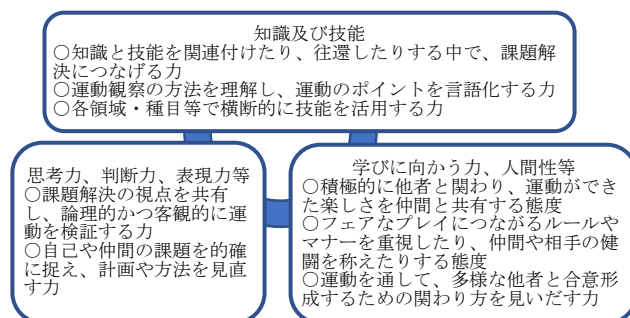


図 1 教科として育成したい資質・能力

3 単元計画 次頁に掲載

4 本時について

(1) 目標

バレーボールのゲームにおいて、フォーメーションを生かした攻防を展開する中で、仲間と協働しながら効果的に得点したり相手の攻めを防いだりすることができる。

(2) 授業構想

本時は、バレーボールの攻防を通して、仲間との連携を生かして得点することや、相手の動きに合わせて空間を狭めて守り切ることを、チームで作戦を練り協働する中で目指していく 1 時間である。

単 元 の 目 標	知識及び技能		次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームを展開することができるようにする。 イ ネット型では、ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防をすることができるようにする。									
	思考力、判断力、表現力等		攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。									
	学びに向かう力、人間性等		球技に積極的に取り組むとともに、(フェアなプレイを守ろうとすること)、(作戦などについての話し合いに参加しようとする)、(一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする)、仲間の学習を援助しようとする(などや、)(健康・安全に気を配ること)ができるようにする。									
学 習 の 流 れ	時間	1	2	3	4	5	⑥(本時)	7	8	9	単元のねらい、意図	
	0	オリ エン テー シ ョ ン	場の準備・ウォーミングアップ・あいさつ・本時の目標確認									・球技(ネット型)の特性を理解し、得点するために有効な手段について深く考えられるようにする。 ・単元のゴールを明確にし、共有する。 ・自チームの目標に合わせて練習を工夫したり、修正したりすることを繰り返す。 ・必要性に合わせ、ICT機器を活用し、自己の動きを客観的に見る。 ・仲間を認める雰囲気作りをし、挑戦しようという気持ちをもつ。
	10		試合の流れ ルール 確認	パス ラ リ ー	作戦会議 チーム練習			作戦会議・チーム練習				
	20		リーグ戦Ⅰ [3-1-3]			リーグ戦Ⅱ [4-1-4]						
	30		ボ ー ル 慣 れ	簡易ゲーム [3]			基本ルール ・一連の動作であればキャッチ可 ・味方のトスからスタート ・必ず3回で返球 ・アタックは後衛の人のみが拾える ・全員がボールに触れる ・最初のトスは出した人に戻る			基本ルール ・一連の動作であればキャッチ可 ・味方のトスからスタート ・必ず3回で返球 ・アタックは後衛の人のみが拾える		
	40			一連の動作を意識 ・動きを止めない ・足を動かさない ・持ち直さない ・体の向きを変えない								
	50	整理運動・振り返り・次時の確認・片付け										
評 価 機 会		1	2	3	4	5	6	7	8	9	評価方法	
	知 技	①				②		①			学習カード・テスト	
	思 考			①		②		①	②		観察	
	態 度		①		②		①		②	①	学習カード 観察	
単 元 の 評 価 規 準	知識	①球技の各型の各種目において用いられる技術には名称があり、それらを身に付けるためのポイントがあることをについて、学習した具体例を挙げている。 ②対戦相手との競争において、技能の程度に応じた作戦や戦術を選ぶことが有効であることについて、言ったり書き出したりしている。										
	技能	①味方が操作しやすい位置にボールをつなぐことができる。 ②相手側のコートの空いた場所にボールを返すことができる。										
	思考	①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。 ②提供された練習方法から、自己やチームの課題に応じた練習方法を選んでいる。										
	態度	①球技の学習に積極的に取り組もうとしている。 ②練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。										

*「評価機会」の通常の数字は形成的評価、白抜きの数字は総括的評価を示す。

*「知識」の総括的評価については、単元テストを実施し行う。

導入では、毎時間実施しているウォーミングアップを通して、ラリーを成立させるために必要な敏捷性や巧緻性と三段攻撃のリズムを覚えさせていく。形式的に行わせるのではなく、試合の中でどのように生かされるのか生徒に理解させ、必要感をもって行わせたい。その後、前時のリーグ戦の結果を踏まえて、チーム内で作戦やフォーメーションを確認し、ゲームの中で表現することを目指させる。試合中も常にコミュニケーションを図り、細かい修正や相手の動きに合わせた工夫を考えさせたい。試合間の短いインターバルも活用し、チームの方向性や特徴を生かした攻めを展開しようとする粘り強さを発揮し、次時からの新たなリーグ戦に繋げていきたい。

(3) 本時の展開

段階	学習内容および学習活動 ・予想される生徒の反応等	指導上の留意点および評価 ・指導の留意点 ○評価
導入	1. 場の設定 (コート設営) 2. ウォーミングアップ (リズムパスラリー) ・ 2チームでネットを挟んで向かい合い、三段攻撃のリズムを確認する。 ・ 相手にボールを返球したら素早くローテーションを行う。 ・ ラリーが続いた回数を全員で数える。 ・ できるだけ一連の動作で行うようにする。 3. あいさつ、本時のねらいの確認 ・ 前時の生徒の振り返りを紹介し、全体として高めたいことを共有する。	・ コート設営の役割を果たしているか確認する。 ・ 全体の設営が終わったことを確認して、ボールを使用した練習に移行させる。 ・ 生徒の言葉として紹介し、当事者意識を高めさせる。
展開	相手よりも多く得点するために、動きを工夫しよう。 4. 作戦会議、チーム練習 ・ 対戦相手、コートを確認する。 ・ チームごとに動きの確認を行う。 ・ 対戦相手の特徴を捉え、より細かい点に目を向ける。 【予想される生徒の反応】 攻撃について ・ 時間差攻撃で、相手とのタイミングをずらしたい ・ ブロックが完成する前に攻撃するために、トスを低く早く出す必要がある ・ スパイクを強く打つよりも、両手で良いからコースを狙いたい 守備について ・ 前に落とされることで失点するので、相手のフェイントを予測したい ・ ブロックでアタックコースを限定したい ・ ブロックを揃えて、少しでもボールの勢いを落としたい チームに関わることについて ・ 失点してしまうと流れが悪くなり盛り返すことができないので、プラスになる声を出したい ・ 相手に作戦を読まれることが多いので、その逆をつけるようにしたい 5. リーグ戦Ⅰ ・ 試合前後のあいさつを気持ちを込めて行う。 ・ ジャッジはセルフで行う。 ・ ハーフタイムや試合間の話し合いの時間を活用する。	・ タブレット上の作戦盤を活用させる。 ・ 前時の反省を生かした内容となるようにアドバイスをする。 ・ 移動を素早くし、試合時間確保に努めさせる。 ・ 一方的な流れとなっているコートがないか気を配る。
終結	6. 本時の振り返り ・ チームで振り返りを行い、遂行できた連携プレー、失点のパターンなどについて、具体的な場面を取り上げながら確認する。 ・ リーグ戦Ⅱに向けて、チームで練習してくべきことを考える。 【予想される生徒の記入例】 ・ 相手のブロックが完成する前に打つことができた。セッターとのタイミングがバッチリだった。次は対策をされると思うので、フェイントも織り交ぜて攻撃してみたい。 ・ ブロックを活用し、相手の攻撃するコースを読むことができた。また、後衛にいるときに空いている場所を伝えて、そこにボールを落とすことができた。 7. あいさつ、片付け	○提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている状況を【学習カード】で捉え、指導に生かす。 ・ 作戦が生きた場面、思うようにいかなかった場面を振り返り、具体的に考えさせる。

参考文献

- ・ 岩田靖 (2012) 「体育の教材を創るー運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めてー」 大修館書店
- ・ 岡出美則ほか (2023) 「ビジュアル新しい体育実技」 東京書籍